

さなぶり休みが終れば田の草取りである。一番草、二番草、三番草までとる。腰をかめ泥をかきまわし手でとる。三番草ともなれば梅雨に入っており、むし暑くてそれに稲も伸びてきているので葉っぱの先が目に入るなどつらい作業であった。その間にクロ（畦畔）草刈りがある。一本のクロを刈るごとに鎌を研ぐ。馬を飼養している家ではクロに毒草（ドクゼリ、キンボウゲ科の草など）が生えぬよう常に除去し、クロ草を馬の飼葉にする。

七月に入れば追肥をする。堆肥を多く入れているか、全然入れてないかで全肥の量を加減する。堆肥の少ない田は田の草取りでも泥が固くて手の爪がすぐ減ってしまう。

穂ばらみ期に入って水管理が大事である。お盆前には一斉に穂が出るが、その年によっては、盆踊りにユカタ着でなく丹前を着て踊るといふ寒い日が続く事もある。こんな年は冷害で単収も少なく、現今のように農業共済制度のない小作農にとっては辛い年になる。

秋、九月も末になれば稲刈りが始まる。すべて手刈りである。刈取機のない時代では稲刈鎌が細くなるまで研ぎ刈るのみである。その日刈った稲は午後三時頃になれば島立に立てる。

九月の末ごろになれば古町の樋ノ口の小田川の川端に番太郎小屋が建つ。番太郎は朝五時と午後五時に作業の開始と終りを告げる太鼓を打つ。午後三時には今日刈り取った稲は島立にする時刻だよ、という合図を太鼓を鳴らして知らせるのである。

秋の日は短い。腰にワラを結んだツナゲを下げて、十二把を一島にして立ててゆく。島立の姿を見れば大体の単収がわかる。穂が垂れているか、威張って反りかえっている島立は中身が無い。人間も同様である。

して残りは堆肥積みにする。また、畳屋へ売る場合もある。戦前、戦後はワラ工品づくりが盛んで、村の産業組合主催の藁工品大会なども開かれた。

食糧管理法が制定されたのは大東亜戦争（太平洋戦争）の最中昭和十七年である。

米をはじめ、食料品から日用雑貨まで殆んど物が、「戦争に勝つまでは」ということで統制され、物価は公定価格にしばられ、自由な売買は一切出来ない時代が長く続いた。

現代の稲づくりは、苗づくりから変わってしまった。箱育苗で苗代に種もみを蒔いた折板を並べ、ピニールトンネルをかけ温度を調節しながら苗代に折板を下ろしてから一カ月ぐらいで田植えである。それも田植機で植えるので、もうユイ（仲間の労働交換）は無くなり、個人毎に植えるので昔子供たちが待ち兼ねた田植えのごちそうを作る事もなくなった。機械植え後の補植はするが、除草も除草剤一回で終り、病害虫の薬剤散布も機械、田なら打ち前の肥料散布も機械なら、クロ草刈りも刈払機を使う。稲刈りも脱穀も、バインダー、ハーベスターからコンバインへと移り、大田作りは扱摺りも自家用になった。

すべてが機械で、人間が機械に使われているような、石油で稲づくりをしている感じがする。

二千年も続いた稲づくりは、昭和の初めぐらいまでは作り方に大きな変化もなくきたが、昭和三十年後半からいろいろと技術が高まり、機械化が進み、今では十ヘクタール、二十ヘクタールの大規模耕作も珍しくなくなった。

土がある限り、日本人が存在する限り、その主食である米づくりは続くだろうし、百姓の果す役割は重大であり、農業という職に誇りを持って生きるべきである。

実の入っているほど頭が低い。

島立は乾田が少ない地域ではクロに立てられる。秋の強い北西の風でクロから転げ落ちたり、長雨で乾きにくい時は立て直しをする。

島立も十日か二週間もすれば今度は、乳穂積みをする。馬やリヤカーが通れる作業道に沿って、五十島か六十島ぐらいの小さな田乳穂を積み上げる。

乳穂の稲が乾いた頃を見て稲の運搬が始まる。馬のある家では、馬に荷駄付用の鞍をつけ、片方に五丸、両方合わせて十丸を馬の背にくくりつけて家へ運ぶのである。この場合島立二島分の二十四把をもって一丸にする。リヤカーには二十五から三十九ぐらいを積んで後押しと二人掛りで汗を流す。

農道整備のない新開や中泡、三本柳などはもっぱら人の背に頼るしかない。重い稲の丸きを三丸か四丸を背負って田のクロを歩くが、夕暮れ近くになれば番太郎の太鼓の音に急かされて膝がガクガクになる。

大田作りの家では、天気の良い日に一挙に運搬してカクジ（裏庭）に大稲乳穂を積んで置くが、一般には、運び次第家の稲場に入れて稲扱きをする。十一月は何処の家でも脱穀機の音がする。夜なべする家からは十時、十一時までもゴリンゴリンと稲扱き音が響く誰もうるさいと怒鳴る人はいない。

脱穀した扱は「扱とし」でとして更に唐箕にかけてふるい分ける。扱は六斗入れの大きい俵で、玄米や白米は四斗入れの俵である。精米所にて扱摺りし、玄米にして小作米の収納となる。自作農は、自家用飯米は扱のまま稲場の一角に設けられた「いごぐ」に保管する。稲ワラは一部をワラ工品用にし、一部を自家用（俵、藁、ツナゲ、縄などの）に残

長慶天皇の御陵について（その二）

近來御陵の荒廢に歸するを嘆ずるもの多く、その筋にてもよくやく注意を惹起し來たれる時、特に王室式微の時に際せる天子の御陵いかで等閑に付せらるべき。この際福岡県のみと言わず本県のごとき証跡の大いに憑るべきものあるにおいて、よろしく速やかに調査して、在天の皇靈を慰め奉らんことを望ましかれ。

（明治32、2、11の新聞記事）

【解説】第九十八代長慶天皇は正平二十三年（一三六八）践祚、在位十六年に及んだが当時乱世のため文献がなく皇位についてものかどうかも不明で、明治年間まで歴代天皇に数えるかどうか学者間にも論争があった。大正十五年十月詔書をもって皇代に列し昭和十九年二月京都市嵯峨天竜寺嵯峨東陵に決定した。

（写真は、岩手県浄法寺町の八葉山（天台寺）の頂上にある伝長慶天皇御墓）

前だれ (エプロン)

もりひら かずこ

昭和三十七年の頃、窮乏生活だった村の小学校で開かれた学芸会の一コマを小説風に書いた作品です。

前だれ (エプロン)

嘉瀬 もりひら かずこ作

小学校の講堂はぎっしりひしめきあっていた。幾日となく、荒狂った吹雪も漸く晴れた旧正の十五日、村の小学校で学芸会が開かれていた。三年生の遊戯「浜辺」が終わると進行係のロッパ先生が「つぎは、第六回、合唱お猿のカゴ屋、一年生一同」とマイクで告げた時でした。会場の後ろで子どもを背負った日雇風のオカミさんがすぐ前に立っている人に落着かぬ様子で尋ねた。

「こんど、一年生出るだべが」

「そんだ」

云い終わらぬうちに手さげを抱えたオカミさんは、人込みをかき分け誰もいない廊下に抜けでた。オカミさんは長い廊下を走った。職員室の前を通り音楽室の前をコの字に曲がって、楽屋に当られた一年生の教室へと走っていった。

教室の入口に着くやいなや、「ユリッ」と叫んだ。

しかし、阿鼻呼喚アビケウカンの教室では誰にも聞こえぬらしく、すぐ前に並んでいたクリクリ頭の二、三人が黙ってオカミさんを見つめるのみでした。

オカミさんはあせっていた。息をはづませ傍に来た女先生の腕をつかみ「先生イ、小野ユリはイネベガ」と声を張りあげた。

先生はびっくりした顔でオカミさんを見つめていたが「ハアおります。

あそこに……ユリさんはどうしたのか合唱に出ないと云うんです」先生は忙がしかった。「さあ、並んでいいですか」先生は、生徒の一人一人の肩を押え込むようにして並ばせていくが、すぐに列は乱れる。

「先生イ、ユリは出ます。これからでもよござすべ、でます、でます」先生の指差した教室の片隅にユリを見つけたオカミさんは、とつさに云い切るのだった。

ユリは、列から離れ、銀砂を敷きつめたような校庭に顔を向け、叱られたときのように、しょんぼり窓ガラスに指先で何か書いていた。

「ユリッ」オカミさんは、節ぶしくれた太い指先でユリの小さな肩をがっちりつかんだ。

振返ったユリは、やがてオカミさんの胸に顔を押しあて、オンオンと泣きじゃくった。

「泣くんでねえ、さあ出るんだ、早く、早く、」オカミさんは、いやするユリをせきたて、懐から真新しい手拭を出して、涙を拭いてやり、鼻の下を強くこすった。

「前だれ、こさいできたね」オカミさんはユリの耳元に低くささやくとユリは「うん」と大きくうなづいた。ユリの顔は、急に秋晴れのよう

に明るくいきいきと輝くのでした。ユリの汚れた綿入れの袖口から、メリヤスのシャツの袖がたれさがり、色あせた赤い足袋からは、踵や指先が寒々と見えていた。

オカミさんは、すばやく黒い爪でたれさがった袖先をもぎとり、手さげから新聞紙の包みを取出した。

その中には一枚の真白いネルの前だれが入っていた。

「声はいいんだから、負けねで大きな声で唄れよ」クルリとユリを後向きにさせ、縫ってきたばかりの前だれに両手を通させ、糸切を口先でちぎった。

「先生イ、お願いします」、ユリは嬉しそうだった。先生の顔をみつめながらにっこり微笑み、一番後から大きく両手を振って舞台に急いだ。オカミさんは、再度廊下を走り、会場に戻った。人をかきわけて前へ、前へと進んだ。

やがて黒い幕がするするとのぼった。生徒が舞台いっぱい並んでいて。合唱が始まった。

オカミさんは、尚も前へ前へと進んでゆく。ユリの顔が見えた。

真白い前だれのユリが生徒の後ろで大きく口をあけて歌っているのが見えた。

オカミさんは立止った。

「ユリッ、ケッパレ」オカミさんは、声にならぬ声援を送っているの

であろう。ユリの口元にあわせて歌っているようだった。

オカミさんの顔は、ゆがんでいた。

ポロポロ落ちる涙を拭こうともせず、合唱が終るまでいつまでも、肩を震わせ立ちつくしていた。

嘉瀬の小話 (その三)

老いても

嘉瀬の四つ角で、七十過ぎの婆様二人が、立話していた。

「今年も正月きてまったなア」

「なんぼ早いば、年いくに従って早くなるんた気するなア」

「ところで、おめだの爺さま死んで何年になれば」

「んー、二十年近くなるじゃ」

「へば、なんぼかほかの牛蒡ごぼうコ食ったな」

「なーもや、なめるも食うもしねじゃ、おめだば、おなごいい

はで、もでだべ」

「なんも、かへでける人もねがったね、せめて、盆と正月だけでも生の牛蒡ごぼうコ食って死にてえなア」

「んだ、んだ」

「村」

表紙解説

白鳥

清久溜池に白鳥が羽を休めるようになったのは五、六年ほど前である。はじめ飛んできたのは三月下旬七、八羽くらいが、ちょっとひと休みといった具合で、一週間ほどで旅立ってしまった。

津軽では、東郡小湊町の浅所海岸、北郡市浦村の十三湖、南郡藤崎町の平川が餌づけなどして白鳥の渡来地として有名であるが、溜池に下りるのはホンの羽を休める二、三日という程度で、以前に長富溜池に白鳥が来ていると聞いても嘉瀬溜池（清久溜池）には下りたことがなかったのである。

次の年は、溜池の水がすっかり融けてしまった三月下旬に十二、三羽が群れて沖合に休んでいたが、これは五、六日で飛び立ってしまった。翌年は、溜池の工事（老巧溜池漏水防止工事）が始まったのが原因なのか白鳥の水に浮かぶ姿は見る事ができなかった。工事中の二年間は天空を列をなして飛翔するのを見せても、水面に下りることはなかったのに、昨年（平成五年）は五、十羽の白鳥が二週間以上も滞在したのである。

そして、今年、三月中旬ごろに二、三十羽の第一陣が来て、岸から遠く離れて水に浮かんでいたが、驚いたことには彼岸の入り日の夕方、溜池の三分の一が白一色に染った如くの大群が波に身をまかせていたのである。

それが朝にはクエークエーと鳴声を立て西の方向に飛んで行き、夕方五時頃には帰ってくるの繰り返しであった。

二十二日の朝六時前に県道の対岸に飛び立つ前の白鳥の写真を撮りに

ゆき、よく観察してみると、五、六十羽ほどが、集団で、幾群かに分かれて居るようである。目測で数えてみると六百羽以上は居るようであった。

集落の西側に開けた嘉瀬の田圃の、そこだけに雪が降ったのか、と思わせるほど一面真白に群ららって昨年の冷害で刈り残した稲を啄む姿も目撃されている。

三月中は白鳥を見にくる人たちが朝早くから夕暮まで後を絶たず、それぞれ餌をやるので、白鳥たちも人馴れして堤防へ上ってきて餌をねだるようになった。

これからは白鳥にとって清久溜池は、北帰行の休憩基地になるのかも知れない。 (山)

◎ハクチョウ目 白鳥・鳥類・ガンカモ科。

シベリヤ北東部で繁殖し、冬季渡来する。

翼長約五〇センチ体が純白で頸部が長くのびているので太い声が出る。

水上に生活し、水草を主食とする。鳴き声はホーンホーンと聞こえる。

オオハクチョウは翼長約六〇センチの大形。ヨーロッパ北部で繁殖し、

北海道の北見、根室、日高地方の海岸に渡来し、本州では青森県の小湊

には大群で渡来し天然記念物の指定を受けている。

— 小学館・原色百科辞典 —

会員名簿

顧問	外崎 三千男
“	木立 民五郎
会長	木村 治利
副会長	原田 万治
兼会計	原田 万治
会計	原田 万治
編集局長	山中 正津
会員	小山内 嘉一郎
	須崎 正敏
	沢田 政孝
	山中 長三郎
	沢田 薫
	秋元 惣之進
	秋元 清逸
	木立 久二
	木下 清一
	吉崎 春雄

II あとがき II

▽かたりべ第十集ようやく、曲りなりに出すことができた。節目の第十集は「迄ご期待」としたことが裏目に出たようである。

▽現会員は、高齢化して、それぞれの人生が歴史であり記録するに値いあると思ひ、各個の五十年前の思い出を記ろうと例会で決めたことであつたが……。

▽昨年は、嘉瀬子供会育成会が、嘉瀬の歴史を勉強（当会員が説明に当る）したということは、若い人たちに昔を知ってもらふことで、大いに意義のある催しであつた。

▽さて、次はどうするか。時代は休みなく過ぎ去ってゆく。

やはり記録を残しておくべきではないかと思う。

(山)

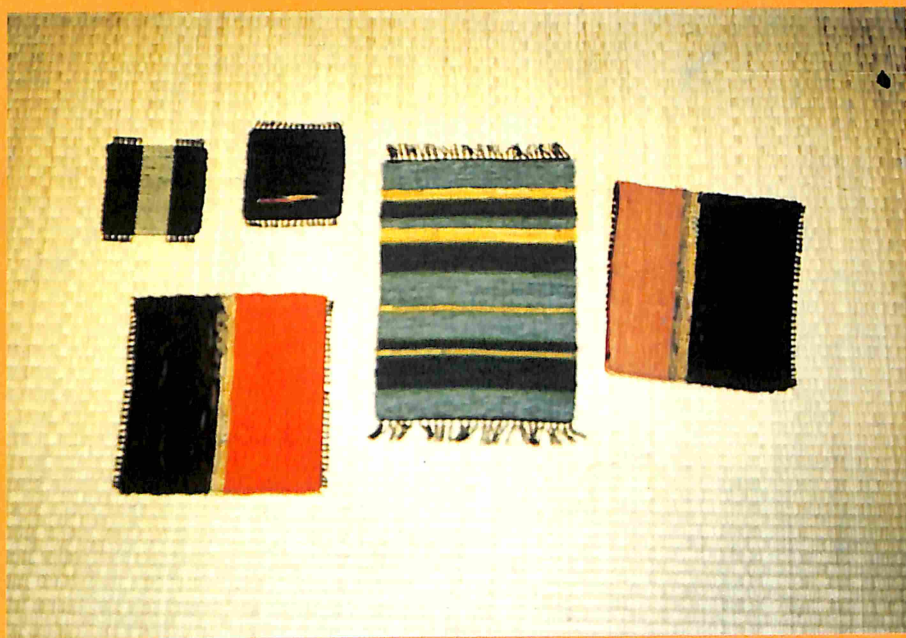
かたりべ第十集

発行 平成六年七月
発行所

嘉瀬ふるさとを探る会

発行者 木村治利
編集人 山中正津
印刷所 朝日印刷

五所川原市一ツ谷
(電話三四一三三一六)



伊藤忠吉記念図書館



1090052333